山田とアルカ姉さん

でーふく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
山田とアルカ姉さん

【Ｎコード】
Ｎ３１２０Ｙ

【作者名】
でーふく

【あらすじ】
アニメ版最終回、シメオンビルでの戦いの後、山田の前からアルカ姉さんが姿を消さなかった場合。

仲直り

「待って、姉さん！」
僕は叫んだ。

シメオンでの戦いの後、僕は神父様やイヴさん達に、これまでのお礼を言って別れた。
でも、そこにアルカ姉さんだけが居なかった。
姉さんは、僕の前から消えるつもりだ。
それに気づいた僕は、姉さんを必死に探した。
そして、見つけた。

「クル……ス？」
後ろから呼びかけた僕に、姉さんは驚き振り向く。
「待ってよ姉さん。どこに行くの？」
僕の問い掛けに、姉さんは苦い顔を作る。
「……私は、もうクルスの前にはいられない……」
「そんな……」
やっぱり姉さんは、僕に黙って消えるつもりだったんだ。

「嫌だよ！　僕はまた姉さんと一緒に暮らしたいのに……」
「しかし私は、取り返しのつかない事をクルスにはしてしまった。
何をしても償えるものではない」
「それは……」
確かに姉さんに裏切られたことはショックだったけど、もう過ぎたことなんだし……。

「私は、自分が許せないんだ……」
姉さんは辛そうに言葉を続ける。

「自分の理想のために、アークライトに騙され、利用されてしまった。　幾らニードレスにとって理想の世界になろうと、クルス、お前が居なければ、私には何の意味も無いのにな……」
　そんなことも、私は分かっていなかったと、姉さんは自嘲する。

「だから、クルス。　そんな馬鹿な私が、これ以上お前に迷惑をかけたくは無いんだ」
　そんな、そんなの……。」
「違う……違うよ姉さん！」
「何が違う！　私はクルスを裏切って、殺そうとまでしたんだぞ！
　そんな私が……今更またクルスと一緒に暮らすなんて、出来るわけないじゃないか……」
「……」
　泣きそうな顔で言う姉さんに、僕は返す言葉が無かった。

「だから、お別れだ」
「あっ……」
　そう言って、姉さんは歩きだした。
振り返りざまに見えた目元には、小さな涙が溜まっていた。
このまま姉さんを行かせてしまったら、もう二度と会えない気がする。
それは……嫌だ。
姉さんの言っていることは分かる。
僕と一緒に居ても、罪悪感に耐えられないのかもしれない。
でも……っ。
僕の気持ちも伝えずに、また離れ離れになるなんて、そんなのは嫌だ！
そう思うと、自然に体は動いていた。

「姉さん！」

去っていく姉さんからこれ以上離れないように、姉さんの温もりをこれ以上離さないように。
追いかけて、後ろから抱きしめた。
「ちょっ、ク……クルス！？」
ぶつかるほどの勢いで抱きついたから、アルカ姉さんは少しよろめいた。

「お別れなんて言わないでよ！」
それでも僕は、かまわず締め付けるほどの強さで抱きしめ続ける。
「別に僕は怒ってないし、姉さんもニードレスの人たちの事を思ってやってたことなんだから、自分を責めなくてもいいんだよ！」
「だ、だが、クルスに辛い思いをさせてしまったのは事実だろう……？」
それは……。
「確かに……辛かったけど……。　それでも、僕はまた姉さんと暮らせるようになるなら、今までの辛さもみんな、救われたと思ってたのに！」
これ以上、アルカ姉さんと会えなくなって辛い思いをするのは、耐えられない。
自分勝手と言われても、これだけは譲れない。

「クルス……お前は、そんなにも私のことを想ってくれていたのか……？」
姉さんの顔は見えないけど、抱きしめた身体から震えているのが分かる。
「うん、アルカ姉さんは僕の、一番大切な人だから……」
一欠片の嘘も混ぜず、本当の気持ちを伝える。
そうじゃないと、自責の念に駆られるいる姉さんに、言葉は届かない気がしたから。

「姉さんは、僕のこと嫌い？」
「そ、そんなことは無い！　私も、その……クルスが一番大切だ……」
姉さんの耳が赤く染まっていた。
「それでも、行っちゃうの？」
「ぅ……あ……」
僕の気持ちを伝えて、それでも姉さんが僕の前から消えると言うのなら、僕はもう止めれない。

「……」
応えは直ぐには返ってこず、姉さんは少し考えてから口を開いた。
「わ、私だって……本当は、クルスと離れたくなんてないんだ……」
こんなに弱気な姉さんの声は、初めて聞いた気がする。
「もし……もし、本当にクルスが構わないと言ってくれるなら、私は……」
そんなの、僕の応えは決まっている。

「構わない。　僕は、姉さんと一緒にいたい」
どんなことがあっても、僕は姉さんが大好きだから。
「……クルスっ！」
僕が泣きそうな顔をしていると、姉さんは振り向き、抱きしめ返してきた。
「ごめん、ごめんクルスっ……　もう、お前を辛い目に合わせたりしない、お前を一人になんかしない、　だから、これからも一緒に居てくれ……！」
震える声で語る姉さん。

「また、一から始めよう。、姉さん」
昔みたいに……いや、昔とは違う。
昔は助けられてばかりだったけど、今度は僕も姉さんを助けたい。

二人で助けあって、暮らしていこう。
「……ありがとう……ぅ、ぁ、ありがとう、クルス……」
姉さんは更に強く、ギュッと抱きしめてきて、泣きそうなほど声が震えていたけれど、顔を確認することはできなかった。

僕の顔が姉さんの胸に押し付けられて、視界が塞がれたから。
少し苦しいんだけど、この姉さんの温かみを離したくないから、もうちょっとこのままで居たいと思った。
あぁ、これでようやく、姉さんと仲直りできたのかな。

仲直り（後書き）

山田とアルカ姉さん物３つ目。

一日目　1

アルカ姉さんと仲直りしてから数時間後、今はアルカ姉さんと二人で自宅に戻っている。
自宅というのは、僕とアルカ姉さんが昔暮らしていた家だ。
アークライト襲撃の後は、姉さんはシメオン四天王としてシメオンビルに、僕は神父様達の協会に住んでいたので、あれ以来家には戻っていなかった。
治安の悪いブラックスポットだし、荒らされてないだろうかと心配したが、幸い誰かが入った痕跡はなかった。

「この家に戻ってくるのも久しぶりだな……」
「うん」
もう姉さんと二人で、この家に戻ってくることは無いだろうと諦めていた。
でも、今こうして、実際に二人で家の中に居る。
それは、とても幸運なことだと思う。

「じゃあ、とりあえず部屋の掃除しよっか」
長い間使われて居なかった部屋は、埃などで汚れていた。
帰ってきて早速だけど掃除はしなければいけない。
「……そうだな」
やっぱりまだ会話がどことなく短くて、ぎこちなさを感じる。
せっかく仲直りしたんだし、昔みたいな関係に早く戻りたい。
それには、僕から歩み寄らなくちゃ。

「じゃあ、私は台所のほうを掃除してくる」
「待って、姉さん」
「ん？」

「その……どうせだし、一緒にしない？　ちょっとくらい遅くなっても、僕はいいからさ」
本音を言うと、少しでも姉さんの近くに居たい。
「そ、そうか……？　クルスがそう言うなら……」
そうして、姉さんと二人で部屋の掃除を始めた。

「姉さん、箒貸して」
「ん、分かった」
姉さんの手から箒を受け取る。
「すまんクルス、ちょっとその机どけてくれないか」
「うん」
机の下を拭くために、机を持ち上げる。
そんな風に二人で掃除していて、なんだかそれだけで、ほのぼのとして、幸せな気持ちになれた。
が、

「……！」
まずい事に気づいた。
姉さん……見えそう……。
姉さんの、あの開放的過ぎる露出度高めの服が、屈んだりするたびに捲れそう……。
シメオンビルでの戦いで、既に破けまくってるし。
出来るだけ意識しないように勤めてたけど流石に限界だよ……。
しかも姉さん……ノーパンだし。

「ん？クルス、どうかしたか？」
「え、あ、あぁ、いや、何もないよ！」
うわ、何か変な顔してたのかな。
「？　そうか？　ならいいんだ」
いけない、なんとかしてなんとかしないと。

とりあえず、服を着替えさせよう。いや、いやらしい意味では無く。
でも、服着替えない？って聞くのも恥ずかしいというか……うーん……。
「何悩んでるんだ？」
姉さんに顔を覗き込まれた。
「わっ！」
また驚いてしまった。
今度は、姉さんの綺麗な顔がいきなり目に入ったのが理由だけど。

「ふふ、なんだかさっきからおかしいぞ、クルス」
微笑まれてしまった。
恥ずかしい……。恥ずかしいのは姉さんだけど。

「えと、そうだ姉さん、お風呂入らない！？　僕達結構汚れてるし」
照れ隠しに、つい言ってしまったけど、服を着替えさせるということには、結構いい作戦かも。
「風呂……？そうだな、戦いの後で、結構汚れてしまってるしな」
姉さんは、自分の身体を眺め、服の汚れを確認しながら言う。
「この服も、もう捨ててしまうか。　ボロボロだし、　もう私はシメオンの一員では無いからな」

どうやら上手くいきそうだ。
別に策というほどのことでもないけれど。
ただ、ちょっとそのボロボロの服は目に毒すぎた。
捨てちゃうってのもちょっと勿体ない気もしたけど。

「そうだ姉さん、着替えあるの？」
「あぁ、タンスの中に前の服が入っていた。
家を離れてそれほど長いわけではないし、まぁ着れるだろう。」

「じゃあ、僕待ってるから、先にお風呂入ってきていいよ」
「……え？」
「え？」
なぜか微妙な反応をされた。

「どうかしたの？」
「いや……、私はてっきり、その……一緒に入るのかと……」
「へ……い、いっしょに……？」
いっしょにって、お風呂に、二人で……？

「え、えええええっ！！」
いやいやいや、そんなこと言ってないよ！？
「さっき、少しでも私と一緒に居たいって言ってただろ……？」
それは、確かにそんなことも思ってたけど……。　というか言ってはいないはずだけど！？
姉さんと一緒にお風呂なんて、そんなの……は、恥ずかしすぎる。
「さ、流石にそれは……」
否定しようとしたその時に、

「やっぱり……嫌か……？」
不安な姉さんの顔が見えて、思わず言葉に詰まった。
「嫌では……ない、かな」
気づけば、そう言っていた。
「そうか！　あ、いや……く、クルスがそう言うなら、仕方ないな」
一瞬顔を輝かせた姉さんだけど、すぐにハッとして顔を赤らめた。
まずい、凄く可愛い。

「じゃあ、僕先に入ってるね」
「あ、あぁ」
言うだけ言って、そそくさとお風呂に駆けていく。

正直ドキドキしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3120y/

山田とアルカ姉さん

2011年11月7日08時16分発行